

要旨

本発表は、ベトナムランソン省チャンディン (Tràng Định) 県のヌン語の母音体系とその特徴を標準タイ・ヌン語 (Doan Thien Thuat 1996) と比較しつつ示すことを目的とする。音節構造、子音音素、声調はチャンディン県のヌン語と標準タイ・ヌン語 (Doan Thien Thuat 1996) の間に大きな違いは見られないが、母音音素についてはそれぞれ異なる体系を持っている。チャンディン県のヌン語は、まず、二重母音が存在しない、次いで、標準タイ・ヌン語は母音の長短対立が1対のみであるのに対し、チャンディン県のヌン語は母音の長短対立が4対あり、標準タイ・ヌン語より母音の長短対立が多いという2つの特徴を持っていることがわかる。単母音に関しては Doan Thien Thuat (1996) が指摘するとおりチャンディン県のヌン語と標準タイ・ヌン語は共通点が多いが、二重母音や長短対立の数ではチャンディン県のヌン語は標準タイ・ヌン語と異なる様相を呈している。チャンディン県のヌン語を特徴付ける長母音 i, u, ə は、通時的観点から見ると Proto-Central Tai の段階の二重母音に由来するものである。

1. はじめに

1.1. 目的

標準タイ・ヌン語地域とみなされながらこれまで詳細な音韻記述がないランソン省チャンディン県のヌン語の母音体系を示し、その特徴を標準タイ・ヌン語 (Doan Thien Thuat 1996) との比較を通して示すことを目的とする。

1.2. 標準タイ・ヌン語

ベトナムの少数民族であるタイ族とヌン族は互いの言語で意思疎通が可能であり、ベトナム国内では「タイ・ヌン語」と総称されることが一般的である。1960年代後半から、方言差が大きいタイ・ヌン語の標準語を定めようとする動きが起こり、ランソン省チャンディン (Tràng Định) 県とカオバン省タイクアン (Thạch An) 県が標準タイ・ヌン語地域と認定された (Hoàng Văn Ma 1975)。

標準タイ・ヌン語は「より多くの語彙や発音を他地域と共有する地域の言葉を選ぶ」 (Doan Thien Thuat 1996) 方法によって、制定されている。すなわち、標準タイ・ヌン語は共時的に見て典型的なタイ・ヌン語の様相を示していると言え、ベトナム国内のタイ語およびヌン語諸方言の特徴を見る上で比較の対象として有用であると考えられる。



図1：ベトナム全図
(黒色部分はランソン省を示す。)



図2：ランソン省地図
(黒丸部分はチャンディン県を示す。)

1.3. ヌン語概要

ヌン語は主にベトナム東北部の山岳地帯で話されている言語である。同じくベトナムで話されるタイ語、中国南部で話される壮語とともにタイ諸語中央タイ語群に分類される (Li 1960)。

1.4. 先行研究

本発表で扱うランソン省チャンディン県は、すでに述べたとおりカオバン省タイクアン県とともに標準タイ・ヌン語地域とみなされている。しかし、Doan Thien Thuat (1996)は各地のタイ語およびヌン語の共通点を抽出してそれを元に標準タイ・ヌン語を示すことを目的としているため、ランソン省チャンディン県のヌン語の詳細な音韻体系は示されていない。

2. チャンディン県ヌン語音韻体系

ヌン語の音節構造は $C_1(C_2)V(C_3)/T$ である。以下にチャンディン県ヌン語の音素を生起位置ごとに示す。

(1) チャンディン県ヌン語音素および声調一覧

C_1 : p, t, k, ʔ, b[β], d[d], pʰ, tʰ, kʰ, tɕ, m, n, ɲ, ŋ, f, s, h, v, z, l, ʎ

C_2 : w, j

w は velar (k, kʰ, ŋ) の後、j は bilabial (p, b, pʰ, m) の後にのみ観察される。

V : ɨ, i, u, ʊ, e, ə, ɔ, ɛ, ɔ̃, ǎ, a

C_3 : p, t, k, m, n, ŋ, w, j, ɰ

ɰ は ǎ の後にのみ観察される。

T : 1 : mid level (ma¹[33]), 2 : falling (ma²[32]), 3 : high rising (ma³[35]),
4 : low level (ma⁴[11]), 5 : low rising (ma⁵[213]), 6 : glottalized (ma⁶[32ʔ])

チャンディン県のヌン語の声調と Proto-Tai の声調の対応は以下の表 1 のとおりである。タイ諸語一般に見られる傾向として、*B と *DL が同じ声調になるという現象がある (Gedney 1972)。チャンディン県のヌン語においても同様の現象が認められる。チャンディン県のヌン語は促音節においても母音の長短で調値は変わらない。

表 1 : チャンディン県のヌン語と Proto-Tai の声調の対応

	*A	*B	*C	*DS *DL
aspirated *f-, *hm-, *ph-, ...	1	3	5	3
unaspirated *p-, ...				
improvisive/glottal *b-, *d-, *ʔ-...				
voiced *v-, *m-, *b-, ...	2	4	6	4

3. チャンディン県ヌン語母音音素

(1)で示したチャンディン県ヌン語母音音素を母音四角形の形で以下の(2)に再掲する。

(2) チャンディン県ヌン語母音音素

ɨ/i	u	ʊ/u
e	ə/ə	o
ɛ	ǎ/a	ɔ

以下に、母音音素の音声的特徴と語例を示す。

- /i/ 非円唇前舌狭母音[i̠]。閉音節のみに生起できる。
語例：ʔim³（空腹の）、t̪ip³（数字の10）
- /i/ 非円唇前舌狭母音[i]。
語例：t̪im⁴（敷布団）、dip³（慈しむ）、t̪i⁵（紙）
- /u̠/ 非円唇後舌狭母音[u̠]。閉音節に現れる場合、短母音として発音される。開音節に現れる場合、長母音として発音される。
語例：t̪u̠ŋ⁵[t̪üŋ˧]（蒸す）、tu̠k⁴[t̪ük˧]（雄）、ku̠¹[ku̠˧]（塩）
- /ü/ 円唇後舌狭母音[ü]。閉音節のみに生起できる。
語例：t̪üŋ¹（高い）、lük⁴（子供）
- /u/ 円唇後舌狭母音[u]。
語例：pun²（埋める）、nuk³（龔の）、ŋu²（蛇）
- /e/ 非円唇前舌半狭母音[e]。閉音節に現れる場合、短母音として発音される。開音節に現れる場合、長母音として発音される。
語例：t̪en¹[t̪ɛn˧]（後ずさる）、pet³[pɛt˧]（アヒル）、t̪e¹[t̪e˧]（置く）
- /ə/ 中舌母音[ə]。閉音節のみに生起できる。
語例：thəŋ¹（着く）、mət⁴（アリ）
- /ə/ 中舌母音[ə]。閉音節のみに生起できる。
語例：thəŋ¹（砂糖）、pək³（皮）
- /o/ 円唇後舌半狭母音[o]。閉音節に現れる場合、短母音として発音される。開音節に現れる場合、長母音として発音される。
語例：p̪jom¹[p̪jöm˧]（髪）、k̪op³[k̪op˧]（噛む）、mo²[mo˧]（牛）
- /ɛ/ 非円唇前舌半広母音[ɛ]。常に長母音として発音される。閉音節のみに生起できる。
語例：t̪ɛn²（金）、pet³（数字の8）
- /ɔ/ 円唇後舌半広母音[ɔ]。常に長母音として発音される。閉音節のみに生起できる。
語例：t̪ɔŋ²（机）、bjok³（花）
- /ä/ 中舌広母音。[ä]よりも舌の位置が後ろ寄りである。閉音節のみに生起できる。
語例：läj¹（流れる）、t̪ät⁴（刈る）
- /a/ 中舌広母音。[a]よりも舌の位置が後ろ寄りである。
語例：laj¹（多い）、mak³（果物）、ma¹（犬）

上記のとおり、u, e, o は環境によって長さが異なり、相補分布を成している。以下の表2に母音の相補分布をまとめる。

表 2 : 母音の相補分布

音素/音声		環境	
		閉音節	開音節
/w/	[ũ]	+	-
	[w]	-	+
/e/	[ě]	+	-
	[e]	-	+
/o/	[ö]	+	-
	[o]	-	+

V と C₃ の可能な組み合わせは以下の表 3 のとおりである。C₃ が -w, -j の場合、ä/a はどちらも生起できるのに対し、ĩ/i, ũ/u, ə/ə は短母音と長母音のどちらか一方のみ生起できる、もしくはどちらも生起できないことがわかる。つまり、ĩ/i, ũ/u, ə/ə という長短対立は C₃ が -w, -j のときには観察されない。C₃ が -ɰ の場合、生起できる母音は ä のみである。

表 3 : V と C₃ の組み合わせ

V \ C ₃	∅	-p	-t	-k	-m	-n	-ŋ	-w	-j	-ɰ
ĩ	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-
i	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
w	+	-	-	+	-	+	+	-	-	-
ũ	-	+	+	+	+	+	+	-	-	-
u	+	+	+	+	+	+	+	-	+	-
e	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
ě	-	-	+	+	+	+	+	-	-	-
ə	-	+	+	+	+	+	+	-	+	-
o	+	+	-	+	+	-	+	-	+	-
ɛ	-	+	+	+	+	+	+	+	-	-
ɔ	-	+	+	+	+	+	+	-	+	-
ä	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+
a	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-

ĩ, ũ, ä は開音節に生起できず、ě, ə はいずれも開音節に生起できないことから、母音の長短対立は閉音節かつ C₃ が -w, -j, -ɰ ではない場合のみ観察される。以下の(3)にチャンディン県のヌン語における母音の長短の対立を示す語例をあげる。

- (3)
- | | | |
|-----|--------------------------------------|---------------------------------------|
| ĩ/i | dĩp ³ (生の) | dip ³ (慈しむ) |
| | k ^h ĩŋ ¹ (生姜) | k ^h ĩŋ ¹ (まな板) |
| ũ/u | bũk ³ (水気がない) | buk ³ (筒) |
| | ʔũŋ ¹ (高い) | ʔũŋ ¹ (重なる) |
| ə/ə | t ^h əŋ ¹ (着く) | t ^h əŋ ¹ (砂糖) |
| | p ^h ək ³ (教える) | p ^h ək ³ (タロイモ) |
| ä/a | läj ¹ (流れる) | laj ¹ (多い) |

fǎj² (火)

faj¹ (漕ぐ)

4. 標準タイ・ヌン語音韻体系

標準タイ・ヌン語 (Doan Thien Thuat 1996)の音節構造はチャンディン県のヌン語と同じく C₁C₂VC₃/T である。まず、以下に標準タイ・ヌン語 (Doan Thien Thuat 1996)の C₁、C₂、V の位置に生起する音素を示す。

(4) 標準タイ・ヌン語音素 C₁、C₂、V (Doan Thien Thuat 1996)

C₁ : p, t, c, k, b, d, p^h, t^h, k^h, m, n, ɲ, ŋ, f, s, h, v, z, l, ʎ

C₂ : w, j

V : i, u, e, ɛ, ɔ, ǎ, a, ie, uɣ, uo

C₁について、Doan Thien Thuat (1996) による標準タイ・ヌン語音素にはʎが立てられていないが、音声的には母音で始まることはなく、常にʎが生起する。Doan Thien Thuat (1996) は標準タイ・ヌン語地域の一つであるカオバン省タイクアン県のタイ語の頭子音音素にはʎを立てている。

C₃の位置に生起する音素および声調について、Doan Thien Thuat (1996) は標準タイ・ヌン語としてのそれらを示していないが、標準タイ・ヌン語地域としてみなされているカオバン省タイクアン県のタイ語の音素および声調を示している。

(5) カオバン省タイクアン県タイ語の C₃および声調 (Doan Thien Thuat 1996)

C₃ : p, t, k, m, n, ŋ, w, j, u[u]

T : 1 : level (ma¹[33]), 2 : falling (ma²[32]), 3 : high rising (ma³[35]),

4 : low level (ma⁴[21]), 5 : rise-fall (ma⁵[212]), 6 : deep falling (ma⁶[31])

上に示した音素および声調素のうち、子音音素および声調は2.で示したチャンディン県ヌン語の音素と大きな差はみられないが、母音音素については異なる体系を持つことがわかる。

5. 母音体系の比較

4.で述べたとおり、チャンディン県のヌン語と標準タイ・ヌン語の間で音節構造、子音音素、声調に大きな違いは見られないが、母音音素についてはそれぞれ異なる体系を持っている。すでに(2)で示したチャンディン県ヌン語母音音素を再掲し、(6)に標準タイ・ヌン語母音音素(Doan Thien Thuat 1996)を母音四角形の形で示す。

(2) チャンディン県ヌン語母音音素

ĩ/i	u	ũ/u
e	ǎ/ə	o
ɛ	ǎ/a	ɔ

(6) 標準タイ・ヌン語母音音素(Doan Thien Thuat 1996)

<u>ie</u>	<u>uɣ</u>	<u>uo</u>
i	u	u
e	ɣ	o
ɛ	ǎ/a	ɔ

(2)、(6)を比較すると、二重母音の有無と母音の長短対立の数という 2 つの点で違いがあることがわかる。まず、二重母音の有無について、チャンディン県のヌン語は二重母音を持たないのに対し、標準タイ・ヌン語(Doan Thien Thuat 1996)は ie, uɣ, uo という 3 つの二重母音を立てている。次に、母音の長短対立の数について、チャンディン県のヌン語はĩ/i, ũ/u, ǎ/ə, ǎ/a の 4 対の長短対立があるのに対し、標準タイ・ヌン語(Doan Thien Thuat 1996)は ǎ/a の 1 対しか存在しない。

6. 通時的観点から見た母音の長短対立

チャンディン県のヌン語に見られる母音の長短対立を通時的観点から考えるために、Li (1977) による Proto-Tai (PT) および Proto-Central Tai (PCT) と比較してみたい。まず、C₃が-p, -t, -k, -m, -n, -ŋ の場合をみていく。

表 4 : チャンディン県ヌン語の母音長短対立に対応する PT および PCT(C₃=-p, -t, -k, -m, -n, -ŋ)

PT (Li 1977)	PCT (Li 1977)	ヌン語	語例
*i	*i	ĩ	dĩp ³ (生の)
*je	*e		tĩm (いっぱい)
*iə	*ii > *i		pĩk (翼)
*iə	*iĩ > *i		tĩn ³ (起きる)
*ie	*iə~*ia	i	kiŋ ² (三脚)
*u	*u		pũk ⁴ (ザボン)
*o	*o		dũŋ ¹ (森)
*iu	*u		lũk ⁴ (子供)
*uə	*uu > *u		p ^h ũk ⁴ (縛る)
*uo	*u		dũk ³ (骨)
*ue	*uə~*ua	u	nuk ³ (聾の)
*ui			tun ¹ (庭)
*i	*i	ə	t ^h əŋ ¹ (着く)
*i	*i		kən ² (人)
*ie	*iə~*ia	ə	lət ⁴ (血)
*io			ləŋ ¹ (黄色)
*ia			tən ² (家)
*ə	*a	a	lǎŋ ¹ (後ろ)
*a	*aa		mak ³ (果物)
*ja			zak ³ (空腹)

表4からわかるとおり、チャンディン県のヌン語のăは、PTの段階で*ə、PCTの段階で*aである。aはPTの段階で*aまたは*ja、PCTの段階で*aaである。つまり、PCTの段階ですでにă/aの長短対立が存在していたと考えられる。

そのほかの長短対立 i/i, ũ/u, ə/ə について考えたい。Li (1977) はPTの段階では母音の長短対立を認めておらず、PTからPCTに移行する段階で*iə>*ii, iə>*iĩ, uə>uu という単母音化が起こり、次いで*iĩ>*i, iĩ>i, *uu>*u という短母音化が起こったと主張している。チャンディン県のヌン語で観察される長母音 i, u, ə は、PTの段階で*ie (PCT: *iə~*ia), *ue, *ui (PCT: *uə~*ua), *ie, *io, *ia (PCT: *iə~*ia)に対応する母音である。すなわち、PCTの初期段階には存在した長短対立が一度消滅した後、PCTの段階における二重母音が単母音化することで長短対立が復活したことになる。

3.で述べたとおり、チャンディン県のヌン語においてC₃が-w, -j, -ŋの場合 i/i, ũ/u, ə/əの対立は起こらず、-ŋに関してはăのみが生起できるので、ă/aの対立もない。C₃が-w, -jの場合のă/aの対立をみていきたい。なお、Li (1977) はこれらのC₃に対応する祖形を母音として考えている。

表 5 : チャンディン県ヌン語の母音長短対立に対応する PT および PCT(C₃=-w, -j)

PT (Li 1977)	PCT (Li 1977)	ヌン語	語例
*əu	*au	ǎw	k ^h ǎw ⁵ (米)
*ou			k ^h ǎw ³ (膝)
*jəu			kǎw ⁵ (数字の9)

*au	*aau	aw	baw ³ (若い男性)
*əi	*aj	ǎj	mǎj ⁶ (木)
*ɛi			fǎj ² (火)
*ai	*aai	aj	laj (多い)
*iai			ɬaj ⁶ (左)

表5に示したとおり、PTの段階で*aを含む場合にPCTの段階で長母音となり、*aを含まない場合に短母音となる。これは表4で見たC₃=-p, -t, -k, -m, -n, -ŋの場合と共通して観察される現象であり、C₃=w, -jの場合においてもǎ/aの対立はPCTの段階ですでに存在していたと考えられる。

7. まとめ

ベトナム国内において、ヌン語はタイ語と総称して「タイ・ヌン語」と呼ばれることが多く、カオバン省タイクアン県とランソン省チャンディン県が標準タイ・ヌン語地域とみなされている。チャンディン県ヌン語の特徴として、母音の長短の対立が4対あること、二重母音が存在しないことの2点があげられる。

チャンディン県のヌン語は13種類の母音音素を有し、長短対立が4対ある。(3)に示したチャンディン県のヌン語の語例は、母音の長短のみが異なるミニマルペアである。このことは、チャンディン県のヌン語はĩ/i, ũ/u, ə/ə, ǎ/aという4対の母音の長短対立を有することを示している。

チャンディン県のヌン語は二重母音を持たないが、標準タイ・ヌン語(Doan Thien Thuat 1996)は10種類の単母音と3種類の二重母音を有している。チャンディン県のヌン語が二重母音を持たないことは、当該言語が持つ大きな特徴の一つと言える。

通時的観点からチャンディン県ヌン語の母音の長短対立をみると、ǎ/aの対立はPCTの段階ですでに存在していたと考えられる。一方ĩ/i, ũ/u, ə/əについては、PTからPCTに移行する段階で類似の対立があったが、このときの長母音は後に短母音化してしまい、現在のチャンディンのヌン語にみられる長母音とは由来が異なる。現在のチャンディン県のヌン語の長母音i, u, əは、PCTの段階で二重母音として存在していた音素が単母音化すること生じたものであると考えられる。

参考文献

- 伊藤正子 (2003) 『エスニシティ「創生」と国民国家ベトナム—中越国境地域タイ族・ヌン族の近代』 東京：三元社。
- Doan Thien Thuat (1996) *Tay-Nung Language in the North Vietnam*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Gedney, J. William (1972) “A checklist for Determining Tones in Tai Dialects”, in Smith, M. Estellie (ed.) *Studies in Linguistics in Honor of George L. Trager*, 423-437. The Hague: Mouton.
- Hoàng Văn Ma (1975) “Tình hình nghiên cứu ngôn ngữ các dân tộc thiểu số ở nước ta trong 30 năm qua”, *Ngôn Ngữ* 4: 1-7.
- Li, Fang Kuei. (1960) “A tentative classification of Tai dialects”, *Culture in History Essays in Honor of Paul Radin*, 951-959. New York: Columbia University Press.
- Li, Fang Kuei (1977) *A handbook of comparative Tai*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Pittayaporn, Pittayawat (2009) *The phonology of Proto-Tai*, Doctoral dissertation, Cornell University.